

『麗しき森の女王』

諫山 裕

ラングーツカの森には、緋色の瞳に黄金色の髪 of 少女が、聖なる獣たちと暮らしているという。

森を恐れる者は彼女のことを魔女といい、森の神々を慕う者は聖女だとたたえる。ただひとつ確かなことは、誰も彼女の姿を間近に見たことがないことだ。

人々は、いつしか彼女のことを、麗しき森の女王と呼ぶようになった。

アマライマ、赤水晶の月に、天空の二つの月——飛龍と双頭蛇——が重なるとき、ララ・エ・ジャリスは大地と天空を結ぶ、光の道を紡ぐ。それは豊穣の大地と戒めの天空とを和解させる儀式である。ラングーツカの民は、儀式がとどこおりなく行われることを祈り、祭りを催す。

——ライロー祭だ。

彼女は街を見下ろす頂から、松明の灯火を眺めていた。天に目を向けると、飛龍と双頭蛇が重なるうとしていた。

生まれたばかりのドラゴンを胸に抱えて、その瞬間を待つ——。

澄んだ声が谷間にこだまし、エコーとなって旋律を奏でる。祭りで盛り上がる街にも、その声は風にのって届く。

人々は耳を澄ませる——。

一条の光が、天へと駆け上がる。

光の道が開かれたのだ。

祭りの喧噪は、まとわりつく羽魚のようにわずらわしいものだった。

エリナ・シスカは、憂鬱にグラスを傾けていた。王宮の魔技師である彼女にあって、麗しき森の女王は不愉快な存在として映っていた。それは国を治める権力者にとつても同様だ。

「ララ・エ・ジャリスの正体を暴け」——彼女は王宮に命じられていた。

本来ならば、もっと地位の高い魔技師が任せられるはずだったが、失敗を恐れる高官たちは、誰も引き受けようとはしなかったのだ。貧乏くじを引いたのは、彼女となった。

しかし、彼女はこれがチャンスだとも思っていた。

魔技師は魔法使いではない。自然の中から秩序を見だし、力を引き出す術を心得た者だ。彼女の師匠たちでさえ、ララ・エ・ジャリスの神秘の力を恐れている。解き明かせない謎に、尻込みしているのだ。

だが、彼女は違った。どんなに神秘的に見えても、かならずからくりがあると考えていた。王族や貴族の思惑に利用されることは本意ではなかったが、謎を解き明かしたいという欲求の方が強かった。

炎を操るには、炎の精霊を手なずければいい。ララ・エ・ジャリスは大地と天空を操る魔技を持っているにすぎない。それを自分のものにできれば――。

エリナ・シスカは、決意をあらたに立ち上がると、陰鬱な酒場をあとにした。

〈未了〉

麗しき森の女王

著 者：諫山 裕

e-mail：yutaka@cat-studio.com

URL：<http://www.cat-studio.com/isayama/>

執筆日：2001年4月2日

発行日：2001年8月30日

※著作者の承諾を得ずに、無断転載、あらゆる形態での二次利用することを禁じます。

copyright (c) 2001 Yutaka Isayama